
日本語学（特集・パソコン通信） 第12巻13号

1993年12月 pp.31-39

研究の道具としての電子掲示板・電子会議・電子メール —SIG「オリエント」のことなど

木越 治

いま、日本で、ふつうにパソコン通信といえば、NECの主宰するPC-VANとか、富士通・日商岩井のNIFTY-SERVE、アスキー主宰のASCII-NETなどを思い浮かべるだろう。これらは全国にアクセスポイントを持つ大規模なものだが、この他にも、地方単位の草の根ネットと呼ばれるものがいろいろとある。これらのほとんどは、一般の人が様々の目的で情報交換をするためのものとして存在しており、会員資格を取得するのに特別の条件はなく、ゲストとして随時アクセス可能にしているネットも少なからずある。その意味では、研究者や大学関係者にしかIDを発行しないように取り決めている学術情報センターや国文学研究資料館のデータベース等の学術的なネットワークとは明らかに性格を異にするものである。

本稿では、こうした商業的BBSの中に存在する国文関係者の集まりを紹介しながら、パソコン通信を自分の研究にどう生かしていくかについて、自分の経験をまじえながら述べていくことにしたいとおもう。ただし、私は、PC-VANのIDしか持っておらず、その他については全く不案内であることをお断りしておく。

—

以前、「パソコン通信に加入してなにが一番便利か」と聞かれて「パソコン通信に関する情報が容易に入手できること」と答えて顰蹙を買ったことがあるが、ここまで皮肉な言い方はしないまでも、一般のパソコン通信で一番得やすいのが、パソコン及びパソコン通信に関する情報である、というのはいまも昔も変わらぬ真実であろう。ただ、そうはいっても、私達のように文字データを主に扱う人間と、コンピュータ音楽に関心のある人間、ゲームや画像データに興味のある人間とではおのずから話題が異なってくる。そうなれば、同じ興味を持つ人間同士が集まる場所があった方がなにかと便利である。ということで設けられたのが、SIG(Special Interest Groupの略)という単位である。それぞれのSIGにはSIGOPと呼ばれる世話人(複数のことも多い)がいて、はじめて書き込んだ人に歓迎のメッセージを書いたり、SIG内のもろもろの雑務や事務局との連絡役をつとめている。ただし、SIGOPの意向が強力に出る傾向のあるSIGとそれほどでもないところというよ

うな差は当然ある。

PC-VAN にアクセスして、そのメニューを見ると、ほとんど目も眩むばかりの多くの SIG の存在を知らされることになる(メニューだけをファイルにしても 250k バイトを超えてしまう)。なにも知らずにはいって来ると、まずこの段階でとまどってしまうに違いない。だから、新たにパソコン通信をはじめる場合は、何を目的とし、どういう情報を得たいのかきちんと把握しておくべきだし、そのための情報も事前にある程度集めておく必要がある。

私の場合でいえば、東京にいる友人からかなり強力な勧誘を受けたことが最大のきっかけであった。いまも愛用しているフリーソフトウェア(注1)のいくつかを disk で送ってもらったりして、かなり便利なものだと思ってはいたのだが、それでも、入会するまでには半年近くかかったと思う。コンピュータをやっと使いこなせるようになったところで、また、新しくめんどろなことを始めるのがおっくうな気がしたからである。結果的には、入会してよかったと思っているが、最初は、電子メールを送ったあと電話でうまくついたか問い合わせたりするなどというバカなこともやった。いずれにしても、これは、パソコンを利用するどの局面にでもあてはまることであろうが、パソコン通信の場合でもいくつかの約束事があり、慣れてしまえばどうということもなくても、最初のうちは非常に戸惑うものである。そういうとき、すぐに質問できる知人がいたのははなはだ都合がよかった。

それと、MS-DOS を主体に使う場合でいえば、最低限、自分で「autoexec.bat」と「config.sys」が書け、簡単なバッチファイルを作れる、というふうでないとパソコン通信に加入してもあまり得るところがなく楽しくないと思う。また、唯我独尊、独立独歩的な人もあまりパソコン通信には向いていない。気楽に教えたり教えられたりする関係を楽しむのでなければ、入会する意味がないと思う。

二

私が常時アクセスしているのは、PC-VAN の SIG のひとつ「オリент」であるが、ここは、国語国文学及び仏教関係の研究者が集まるところになっており、国文関係の旧知の人も多い。相手の顔が見えないパソコン通信といえども、未知の人ばかりの集まりに参加していきなり発言したりするのは相当に勇気のいることだから、その点でも、既知の人が数人いたこの SIG の場合は、通信をはじめてすぐに書き込むことができたし、いまでも、PC-VAN にアクセスしたときはまずはじめにのぞく場所になっている。ここではじめて出会い、その後御本人と対面した、という方も何人かいるが、不思議なもので、こういう方とは初対面でも割合スムーズに話ができるものである。もちろん、国文関係者は必ずここにいなければならないということではないのだが、繁華街になじみの酒場が必要なように、やはり常連として出入りする SIG がどこかにひとつくらいはあって、そこで得た情報をもとに他の SIG にも出かけてみる、というのがいいようである。

以下、SIG の一例としてこの「オリент」の場合を紹介しておこう。この SIG は次のような構成になっている(ここへは、PC-VAN のメインメニューからジャンプコード「JORIENT」によってすぐに到達できる)。

オリエント (ORIENT)

1. このSIGについて
 2. 電子メール
 3. フォーラム
 4. ライブラリィ
 5. 電子会議室
 6. OLT (*)
 7. OSL
 8. SIG内OSL検索
- E. コーナー終了

このメニューの3番にある「フォーラム」が、与えられたテーマでいうところの「電子掲示板」にあたるわけである。このフォーラムには

1. パピルスー研究室ー
2. オアシスー談話室ー
3. コスモスー開発室ー
4. コルプスー資料室ー

という四つの部屋(ボードという呼び方をしている)が設けられており、これらのボードに書き込む内容については、おおざっぱな取り決めがある。

1の「パピルス」には、学術的な内容(書物の紹介や関連学会の案内なども含む)が主として書き込まれる。当初は、プログラム関連の話題も多かったが、「コスモス」が開設されてからは、そちらに移ったので、現在は学術的な話題が主になっている。いわば、このSIGの顔にあたるボードである。

2の「オアシス」は、「パピルス」よりはもっと自由な、身近の話題などが書き込まれる。私が初めて書き込んだ内容は、息子が高校に入ってよかった、よかった、というものであった。若い人の集まる他のSIGのこの種のボードには、毎日50とか100という数のメッセージが書き込まれて賑やかなところも多いが、さすがに、こちらではそんなことはない。

これら二つは1987年12月の「オリエント」開設当初から設けられている。

3つめの「コスモス」は1989年3月に開設されたボードで、プログラムやコンピュータを使用する際の技術的な問題について書き込むことになっている。ここに登録されたプログラム類は、いわば同業者が必要に迫られて作ったものであるから、他のメンバーにとっても有用なものが多い。ここに登録されているmtoyo氏作成の「SORTF」は、MS-DOS最強のソートツールとして非常に人気があり、新版が登録されたときは普段の常連以外のメンバーの書き込みも多くなる。作成者に対する謝辞や感想・要望・バグの報告等が行われるからであり、そういうやりとりを経て、すぐれたフリーソフトウェアが育てられていくわけである。

「コルプス」は、同年の9月に設けられたもので、大部なテキストデータを登録する場

所になっており、活字になった論文やその他のデータが登録されている。活字になった論文等をここに登録して、抜刷を送る代わりにする、というような利用法も可能である。

この原稿を書いている 1993 年 10 月末までの各ボードの書き込み数は

パピルス	2493	コスモス	1678
オアシス	2922	コルプス	222

という具合である。他の SIG に比して書き込み数は少ないが、一つのメッセージは割合に長いものが多いようであり、また、特に試験期間とか休み中(すなわち、参加メンバーの本業が忙しくなる時期)は書き込み数は少なくなる傾向にある。それだけに、しばらくアクセスできなくても、話題についていけないというようなことはなく、自分なりのペースでかかわりがもてるので気楽である。

この SIG のメインはこのフォーラムであるが、その他、OSL も、数は特に多いとは言えないだろうが、この SIG の特性に応じた各種のフリーソフトウェア(当然のことながらテキストデータを扱うためのツール類が多く、各種の暦を対照できる「WHEN」〈注 2〉などもこの SIG らしいものといえる)が登録されていてかなり充実している。ただし、これらをダウンロードする際には、PC-VAN のきまりで普段とは別に料金が徴収されるので注意が必要である。

三

ただ、これらのボードへは、会員ならだれでもアクセスできることになっているので、常連の書き込みメンバー以外にも読むだけの人(こういう人を Read Only Man 略して ROM という)がいたりする可能性はつねにある。だから、人によっては、読んで欲しい相手を選べないので書き込むのがいやだという人もいる。

その点、電子メールならば、自分の指定した相手にしか届かないわけだから安心である。送りたい相手をひとつのグループとして登録する機能を利用して、グループ宛のメールとして送るという方法もある。ボードには書き込まないが、時折電子メールでいろいろやりとりする、というように利用している人もいる。

このグループ宛電子メールの機能を積極的に利用しているのが、国語国文関係のメンバーを中心に七、八年前に作られた「情報処理語学文学研究会(略称 JALLC)」の運営委員の会議である。ここの委員は、原則として、PC-VAN に ID を持つ人から選ばれていて、私も二年ほど前からその委員をつとめているが、田舎住まいにもかかわらずなんとか委員がつとまっているのは、この運営委員による電子メール会議のおかげである。研究発表会やその他の打ち合わせ事項について、代表者やその他のメンバーが委員全員にメールを出し、問題点や質問・意見があれば、それぞれのメンバーがメールを出す、というかたちで意見をまとめ、必要があれば、議事録が回覧され、チェックを受けて、記録に残す、というようなシステムは、もちろん、数年に一度は顔を合わせて会議をしたり研究発表会に出る、というようなことが前提になっているとはいえ、なかなか便利なシステムといえる。このメンバーは、そのままオリエントに書き込むメンバーとも重なっているので、JALLC だけでは片づかない、たとえば電子化されたテキストデータの著作権をめぐる問題などについては、議論を広げるために、オリエントの「パピルス」に場を移して行われるような

こともある。

もちろんこうした会議形式をとらずとも、個人あるいは数人の間でメールを介して情報交換のグループを作ってもいいわけである。

前に、私が JALLC で発表したときは、会場校に気安く頼める委員がいた関係で、発表の資料はメールで送り、印刷を頼んでおくことができた。おかげで、大部の資料を送ったり、当日持参したりする手間が省けて非常にありがたかった。こういう方法は、別にパソコン通信を使わなくとも、disk のやりとりでもできるわけで、フロッピー入稿がそれほどめずらしいことではなくなった現在では、その気になれば一般の学会でも採用できる方法だと思う。

四

私が「パピルス」にはじめて書き込んだのは、log ファイル(=通信記録をファイルにしたもの)を調べてみると、1988年12月2日のことである。ROMにならないよう、積極的に書き込んだほうがいいと言う友人の教えを素直に実行して、少し緊張しながら、初登場の挨拶といっしょに、古典作品の翻刻では「ハ」や「ミ」をそのまま残すことがよくあるが、こういうのに意味があるのだろうか、というようなことを書き込んだのである。その当時、上田秋成の字母の用法に興味を持って調べていたところなので、そのへんの問題意識で書いたものである。

これに対して、数日のうちに、未知の人を含めて十人近くの方から反響があった。反応の大きさにびっくりすると同時にとても感激したのを覚えている。

- これに気をよくして、次は「こんなことのできる UTILITY がありますか?」という題で、
- (1) 文字列がひとつの行に重複してあれば、重複の数だけ出力してくれる検索用ツール
 - (2) ある文字(列)が複数のファイル中にいくつあるかを勘定して、ファイル別・文字列別にその数を出力してくれるツール。
 - (3) 訂正したファイルと訂正前のファイルを比較して、どこが訂正されたかを対照して一覧できるもの。
 - (4) DOS の SORT への不満(ファイルサイズの制限等)を解消してくれるソート用ツール。

を教えてほしいと頼んだ。このときはまだ「コスモス」ボードがなかったので、こういう質問も「パピルス」では頻繁に行われていたのである。これに対してもいろいろ反響があったが、最終的に、

(1)は SED の正規表現を利用することで実現できたし、(2)はワープロ「松」に付属の「BFIND」(これはフリーウェア扱いになっている)がもっとも便利であった。(4)は、このとき紹介された「QSORT」を長らく愛用していたが、やがて、「コスモス」に前述の「SORTF」が登録され、順次バージョンアップを重ねていくようになると、すぐにこちらに切り替えた。ただ、(3)だけは、MS-DOS の「FC」が紹介された程度で、結局はエディターのファイル比較機能を活用する程度ですませるしかなかった。

こういうやりとりを通して、この SIG では、ちゃんとしたことを書き込めばそれなりの反応が得られることがわかり、最初の一年ほどはいろいろなことを書き込んだが、その

なかには、純国文学的な話題も少なからずある。秋成に興味をもつメンバーが四、五人いたこともあって、『雨月物語』の諸註釈書をどう見るか、といったような話題とか、古典文学作品についてのあるべき作品論とはどのようなものか、というような話題に私は中心となって参加し大いに盛り上がったのだが、こういう話題は、いま log を読みなおしてみても、言葉足らずのところがあったりして、ちょっと恥ずかしい気がする。返事を書くのに一晩かかるようなこともあって、衆目監視のなかで議論をすることともあわせ、当事者としては、結構キツかった、という記憶の方が強い。

それよりも、たとえば、当時使っていた日本語 FEP である VJE の会社の人が入りしっていたのを幸いに、我々カナ入力派のために、FEP の ON/OFF をカナキーの ON/OFF で実現できないかという注文を出したメンバーがいて、たしか 20 回近くの改訂を経て使えるようになったはずである。私も一、二回使用報告をしたが、その誕生から完成のプロセスをまのあたりにして、なるほどこうやってプログラムというのは完成していくのか、と感動したものである。こういうツールはどんなに小さなものでも、できあがったのを単にコピーしてもらっただけというのとは違ったよさがあり、愛着も深い(なお、同じ物が、現在使っている FEP である WX2 にも W XKANA として存在しており、大変重宝している)。

その他に、私が、注文を出して作ってもらったもので他の人にも参考になりそうなものをいくつかあげてみる。

1. FEP の ON/OFF、カナキーの ON/OFF にかかわらず、「Y・N・1・2・3」の位置にあるキーを押せば「Y・N・1・2・3」が入力されたとみなすツール

これは、ハードディスク導入後しばらくの間いくつかのアプリケーションソフトをメニュー方式でたちあげていたのだが、番号や y/n 入力の際、いちいち FEP やカナキーを OFF にしなければならなくてうっとうしいと不平をもらしたところ、mtoyo 氏が作って下さったものである。その名を「seterrlv」という。

2. 漢字の部首順のソート

これは、日本漢文学を専攻する後輩から「部首順のソートをコンピュータでやらせるのは不可能なのだろうか」と質問され、それをそのまま書き込んだところ、「MOROX」(MASSAN 氏作。ソートの対象となる漢字を強引に大漢和に並ぶ順にいったん置き換えてソートし、そのあともとに戻す、という方法で実現しているもの)と「ADDKINF」(mtoyo 氏作成、別に用意してある漢字辞書から部首に関する情報を読み出してソートするもの。同じ方法で画数順のソートも可能である)という二種のツールが示された。

3. 行末にある CRL+L ごとに行番号をリセットして付ける方法

これは、注釈作業での必要上お願いしたものであるが、これに対しては、JGAWK・JPEARL・Vz のマクロ・C 言語・MIFES のマクロという実に五種類の方法が示された。

この他にも、こまごました質問に答えてもらったことは多く、いずれもそのときどきの必要に迫られて注文を出したもののだが、どの場合も迅速かつ的確に解決方法が示されたの

でとてもありがたかった。

五

こういう応答を通して感じたのは、こちらが何をやりたいかを明確に示せば(むろん、それがコンピュータで実現可能だという見通しは必要なのだが)、たいていは実現してもらえる、ということである。もちろん、質問に答えてもらったり、なにかを作ってもらったりとしたときは、きちんとお礼を言うとか、不具合があればどういう状況でそうなるのかをきちんと説明する、というような最低限のマナーは守る必要があるのだが、そういう点さえきちんと守っていけば、これまでちょっと無理かなと思っていたこと、不便だなと感じていたことが解決され、自分のパソコン利用の世界は非常に広がっていくことが実感されたのである。

それと同時に、こういうフリーウェアの作者とユーザーのあるべき関係の彼方には、GNU あるいは FSF といった、アメリカのソフトウェアの自由な流通をめざす団体の活動が存在することも次第に知るようになり、その活動理念のもつ意義も自分自身の問題として理解するようになった。それまで、手元で大切にかかえこんでいた秋成やその周辺のテキストデータ類をフリーソフトウェアに準ずるフリーテキストデータとして積極的に提供する気持ちにもなったのはこのためである。それは、私なりにできるお返しの方法であった。

その意味で、パソコン通信に参加して得た最大のものは、GNU や FSF の活動の意義を、自分自身の問題として考えられるようになり、それに対して、自分なりに少しでも寄与したいと思うようになったことであるというべきかもしれない。が、この問題については、いまオリエントでもさかんに問題になっている電子媒体によるテキストデータの著作権の問題とも関連するので、詳しくは稿を改めて論じなければならぬので、とりあえずいまは、〈注 3〉にあげた文献を参照していただきたいと言うしかないが、この GNU や FSF の活動の背後にある過激な理想主義は、パーソナルなものとしてコンピュータを利用していく限り忘れてはならない理念だということだけは言っておきたいとおもう。

注

1. フリーソフトウェアとは、作者が著作権を保持しつつコピーフリーを宣言するソフトウェアのことである。著作権を放棄した PDS (Public Domain Software) とは区別して扱われるべきものである。
2. コマンドラインから、たとえば、

A:¥>when 万延 133

とやると、

ユリウス通日 2400494 (土) 丁卯

日本暦日	安政	7	3	3	弥生
グレゴリオ暦	1860	3	24	March	
イスラム暦	1276	9	2	Ramadan	
マヤ長期暦	12	12	5	0	11
マヤ短期暦	11	チュエン	19	パ°シユ	

と表示されて、桜田門外の変の日の大雪は、西暦でいうと3月24日に降ったものだということがたちどころにわかるツールである。Suchowan 氏作。

3. 引地信之・引地美恵子編著『Think GNU』（ビレッジセンター刊、1993年2月 4500円 412頁）、この本自体もGNUの精神にのっとり、オンライン・ブックとして提供されている。後半部のいくつかの宣言文が端的にその理念を伝えている。